



## 図書館と新聞

中川雅彦

膨大なアジア図書館の新聞コレクションに私自身がわずかながら貢献したことがある。在日朝鮮人団体のある研究所が財政的な事情で閉鎖されることになったときの

ことである。そこには朝鮮民主主義人民共和国建国当時の新聞が保管されていた。この研究所の人々は、この現物は売り払わざるをえないが、なんとかこうした貴重な資料が他の研究者たちに利用されるようにしたいと考えていた。私は当時の橋本館長と相談し、アジア図書館でこれをマイクロフィルムに撮影して所蔵することにした。そして、私は当時の東川資料収集課長とともにこれを借り出した。当時のマイクロ室の職員たちは他の仕事を後回しにして、至急撮影に取り掛かり、二ヶ月ほどの間にそのすべてを撮影することができた。まさにマイクロ撮影の能力を持った図書館ならではのことであった。

新聞は図書館で厄介者扱いされている場合が多い。現物を保管するにはかさばるし、しかも紙の劣化が速い。しっかりと製本された書物のほうが図書館員にとってもありがたいはずである。しかも、学問の世界でも新聞は低俗なものであって、相手にするものではないと考えている人が少なくないようである。「新聞など資料ではない」と

いう大学教授もいるし、内容に深みがないという意味で「新聞の切り貼りみたい」と比喻が用いられることもある。

しかし、現状分析の一次資料は新聞である。ある事柄に関して、本当に新聞の切り貼りをして蓄積し、丹念に事実の進行を分析していけば、それを巡る大きな流れが見えてくる。これこそが現状分析の醍醐味である。また、現在進行中の重要事を分析するのに過去の新聞を遡って調べることも多い。古い新聞を見つけれずに、悔しい思いをすることもある。

電子媒体の発達でこうした作業はかなり容易になってきた部分はあるものの、やはり限界がある。電子媒体には古い記事が収録されていなかったり、削除されていたりするところがある。また、電子媒体に載っている新聞記事も、それが微妙な問題だったりとすると、いつの間にか削除されていたり、後で書き換えられていたりする場合もある。新聞の縮刷版でも、日本のある全国紙は誤植を訂正したうえで収録しているので、内容まで手を付けているのではないかと疑いたくなる。やはり、もつともありがたいのは自分でとっている新聞を自分で現物のまま、あるいはマイクロフィルムなどに撮影して保管している図書館である。アジア

図書館にはぜひこの能力を失わないようにしてもらいたい。

その後、その在日朝鮮人の研究所は完全に閉鎖されるに至り、研究所の人々が保管していた図書の一部がアジア図書館に寄贈されることになった。私はこの搬出にも一役買った。その研究所の建物が急遽債権者に接収されることになり、接収される前日の夜一〇時ごろ、私はその研究所を訪れた。そして私と研究所の人で運び出す資料を選び、それを箱に詰めた。午前三時によくやぐミカン箱四〜五個の資料を通りに持ち出し、タクシーを拾った。タクシー代は勿論自前である。その建物は接収されたその日に取り壊され、こんにちその場所にはマンションが建っているそうであるが、研究所の人たちが収集してきた資料の一部はアジア図書館のなかで生き延びている。

(なががわ まさひこ／アジア経済研究所 所東アジア研究グループ主任研究員)

